

はじめに

1896 (明治 29) 年 6 月 15 日、旧暦の 5 月 5 日、三陸地方の村々は、前年の日清戦争の勝利を祝うべく、凱旋兵とともに端午の節句の日を過ごしていた。朝からどんよりとした、小雨が降ったりやんだりした日だった。午後 7 時 32 分頃、人々は緩やかな地震の揺れを感じた。現在の震度にして 2、3 であると思われる小さなものであったようだ。緩やかな、長く続く地震動だったが、人々はさして気に留めなかった。この約 30 分後に、巨大な津波が不意に來襲し、我が国の津波災害史上最大の、2 万 2 千人にのぼる死者を出した。

地震の規模の割に非常に大きな津波を引き起こす地震を「津波地震」と呼ぶが、明治三陸地震津波はこの「津波地震」により引き起こされた津波であったと言われている。津波そのものの大きさもさることながら、津波來襲の警笛となるはずの地震動が小さかったために、前触れなき大津波として、語り継がれている。

本書は、明治三陸地震津波後に報告された資料に基づき、当時の津波災害から得られた知見や教訓をまとめたものである。

第 1 章では、明治三陸地震津波以前の三陸地方の津波災害史の概要を述べる。

第 2 章では、明治三陸地震津波の特徴である「津波地震」の発生メカニズムや、当時の津波の來襲状況を詳しく述べるとともに、津波防災対策上重要な津波地震の予測可能性を論ずる。

第 3 章では、津波の來襲により、三陸地方で発生した被害と被災地の様相を明らかにし、得られた資料から、津波災害にともなう被害額の算定を試みる。

第 4 章、第 5 章では、津波に襲われた被災地がどのように復旧したかを、直後の行政対応や、被災者の救護活動に着目して明らかにする。

津波による壊滅的な被害を受けた三陸の村々はどのように立ち直っていったのか。同じ悲劇を二度と繰り返さぬよう、人々は集落、家の再建にあたり、より高地に移り住むことを選択した。

第 6 章では、被災地がどのように復興したかを、特に被災集落の再建、学校再開、高地への集落移転に着目して述べる。明治三陸大津波の 37 年後にあたる 1933 (昭和 8) 年、この地は再度大津波に襲われる。このときに被害発生のも暗を分けた事例を集落毎に分類し、集落の高地移転による成功例や失敗例を紹介する。

第 7 章では、全体の総括として、明治三陸地震津波災害から学ぶべき教訓を、現在の津波防災対策との関連で述べる。

また、本文中に引用した文献で下線のあるものは、第 8 章に原文として掲載することとした。津波の迫力、悲惨さをもっともよく伝えるためには、むしろ原文を参照したほうがよい場合もあるからである。